

自由と自立への旅の始まり

奨励	三木　メイ〔みき・めい〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター助教
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

主はアブラムに言われた。
「あなたは生まれ故郷
父の家を離れて
わたしが示す地に行きなさい。
わたしはあなたを大いなる国民にし
あなたを祝福し、あなたの名を高める
祝福の源となるように。
あなたを祝福する人をわたしは祝福し
あなたを呪う者をわたしは呪う。
地上の氏族はすべて
あなたによって祝福に入る。」
アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。
アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。

（創世記　１２章１―４節）

新たな大学生生活の始まり

今日は、２０１４年度最初の水曜チャペル・アワーです。新しい年度が始まるとき、皆さんはどんな気持ちでこのときを迎えているでしょうか。昨年度までいろいろなことを経験してきて、今日もその続きの日々の一日なのですが、やはり４月からもう一度振り出しに戻って新しく歩み始めるのだ、という清々しさを私はこの時期に感じています。特に、今年４月に入学した学生の方々のほとんどは、初めて大学生活に入ったところで、まさに新たな旅立ちを始めたばかりです。いろいろな意味で新しいこと、初めてのことだらけでこの最初の１週間はとても緊張して、疲れているだろうと思います。

高校生時代と一番違うのは、いろいろな意味でこれまでより遥かに大きな「自由」が与えられている、ということではないでしょうか。
同志社大学は、建学の精神の一つに「自由主義」を挙げているぐらい、さまざまな意味で一人ひとりの自由を尊重する伝統をもっています。この「自由」は、何をやっても許されるのだという自由ではありません。責任を伴うのが当然の自由です。自分で聞いて、見て、判断して、自分で決めて、行動して、その結果は自分が責任をとる。お父さんも、お母さんも、先生も、代わりに責任を負ってくれるわけではない。どの科目を履修して、どのサークルに入るか入らないか決めて、どこでお昼を食べればいいのだろうか、勉強にはついていけるかな。２回生以上の方も、あのころは大変だったな、と思い出すでしょう。これは、大人として自立していくプロセスのなかで必要不可欠な訓練だと言えるでしょう。大学というのは、一般社会と違って基本的にまだ周りに守られて暮らせるところです。社会に出ればもっとさまざまな責任を負いながら、生活していかなければなりません。

人の一生は旅

「自由と自立への旅の始まり」について、今私たちの身近で目に見える一例として、大学生生活の始まりのお話をしましたが、実はこの「自由と自立を求めていく旅」は、大人になって落ち着いたら終わるというものではないのです。そのことを皆さん、頭の隅にしっかり刻んで覚えておいてください。精神的自立と経済的自立を果たさなくてはならない、という課題に向き合わなくてはならないのは、20代の若者にとつての大きな課題ですが、これは大人になってもずっと続くのです。そして、「自由」というのも、本当の意味でそれを獲得するのは簡単なことではなく、とても難しいことなのです。たとえば、もっと理想的な自分になるために頑張らなくてはと思っているうちに、「ああ、自分はなんて駄目な人間だ」と考えるようになって、自分で自分をがんじがらめにしてしまっていた、ということもあります。そういう自分の今までの価値観の堅い枠組みからどうやって抜け出すかという「自由」への旅が必要な場合もあります。人の一生は旅ですし、いつでもどこからの旅立ちが必要な時がくるのです。

聖書には昔のいろいろな人の人生の旅の始まりや終わりについて書かれているのですが、今日取り上げたのは旧約聖書の創世記のアブラムの物語です。このアブラムには、テラというお父さんと、二人の兄弟とサライという妻がいたけれど子供がいなかった。そして、故郷はカルデアのウルという町だった、と書かれています。この「ウル」は、メソポタミア地方のユーフラテス川の下流にあった古代都市のウルかもしれない、と言われています。その故郷から出発して、川をさかのぼってハランというところまで来たときに、お父さんのテラが亡くなってしまいます。アブラムは、父の後を引き継いで部族の長として皆を引き連れて旅を続けなくてははいけません。彼らは、砂漠性気候の地域のなかを、家畜を連れて水と食料を求めて旅をする遊牧民です。いつ、どちらの方向に移動して生活していくか、そのタイミングと方向を間違ったら、家族と家畜のすべての命が危険にさらされてしまいます。そういう旅長としての重い責任を、一身に背負って旅を続けなくてはならなくなったのです。

アブラムの旅の始まり

このアブラムがどんな人物だったのか、ということはこちらよりは全然書いてありません。善い行いをしていたとか、人柄が良かったとかは書いてありません。とにかく、父親の死亡という一つの大きな転機を迎えて、アブラムは悲しみを乗り越えて、旅長としての責任を担って一族を守り導いていかななくてはならなくなった。そういう旅の始まりのときに、神の声を聞くのです。

「主はアブラムに言われた」という言葉で、神とアブラムの物語が始まります。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。（中略）地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る」（12章１～３節）。アブラムは、この主なる神の言葉に従って旅立つて行きました。

「生まれ故郷」と「父の家」というのは、自分が住み慣れた町、自分の安心が守られていた家族を象徴する言葉です。神は、そこから離れなさい、旅立ちなさい、と言われているのです。そして、「わたしが示す地」とはどこなのでしょう。アブラムの物語では、現在パレスチナと呼ばれているカナン地方になっています。しかし、ここで考えてみてください。皆さんにとって、自分が旅立っていく目的地はどこですか。一人ひとりイメージする目的地は違うでしょうけれど、どこでしょうか。神の声を聞いたアブラムは、自分にはまだその目的地が分からない。けれど、神がそれを示してくださることを信じて出発するのです。神は、そのアブラムを祝福します。彼一人だけではなく、彼によって地上の氏族すべてが祝福に入る、と神は語っています。それは、神が彼の旅の歩みを支え、導き、最後にはその旅が後の時代の多くの人びとに良い結果をもたらすだろう、という意味でもあります。皆さんのそれぞれの旅立ちも、神に祝福されています。私はそう信じます。ただ、今日集まった皆さんは、神信仰をもっていない人が多いと思いますから、「神」という言葉を言い換えておきましょう。たとえば、皆さん一人ひとりに生きる意味を与えてくれる「何か」、教えてくれる「何か」です。いずれ人間は皆死にますが、死すべき者であっても、苦しみ、喜び、悲しみ、楽しみを経験しながらさまざまな人びととつながって生きる、その意味を教えてくれる「何か」、と言ったらいいでしょうか。それが皆さんの旅の歩みを支えてくれるはずです。そして、その意味を求める旅は、真理を追求していけば、きっと自分一人の幸福を追求する旅ではなくて、他の多くの人びとの幸福にもつながっていくはずですよ。この「何か」はそれを私たちに伝えているのです。この「何か」の声は、超常現象のようにどこから聞こえてくるものではありません。旅をする人間が、自分の心の奥底に耳を傾けることで、聞こえてくる声なのです。その声に従って、すでに皆さんは歩み始めているのではないのでしょうか。アブラムと同じように。

聖書のメッセージ

聖書というのは、今から何千年も前に伝承された書物であり、その内容はさまざまな地域で、歴史的に継承されていきました。単なる昔の古典ではなくて、それぞれの時代において、これを読む者に多くのメッセージを語りかけてきた書物です。ここから現代に生きる私たちが、聖書からのメッセージをどう聴くのか、という問題があります。難しいことです。簡単ではありません。その問題に取り組むために、「神学」という学問があります。そのなかの一つを今日少しだけ紹介しました。昔のアブラムの物語を読んで、そのまま表面的に受け取って読むのではなくて、どんな象徴的な意味が込められているかを考えてみる読み方です。そうすると、時代を越えて、人間がどう生きるのか、人生の歩みを支えてくれる言葉に出会えるだろうと思います。だから、聖書は今も世界中の多くの人びとにとって重要な価値ある書物ですし、今もベストセラーなのです。そういう出会いができるようお手伝いするのが、牧師の仕事であり教員でありチャプレンである私の仕事だと考えています。

このアブラムは、この後の聖書物語において、神から救いの契約をいただいて、「アブラハム（多くの国民の父）」という名前に改名します。ですからアブラハムは、イスラエルの民の信仰的な「父祖」と言われているのです。つまり、古代のイスラエル民族において、神を信じる信仰をもって人生を歩んだ最初の祖先と見なされている人です。イスラエルの民というのは、現在のユダヤ人の信仰的な意味での祖先、ということになります。この神から与えられた約束は、アブラハムとその子孫に与えられると聖書にあるので、後の時代にも大切

に受け継がれて、「私たちは神の民だ、アブラハムの子だ」という信仰とアイデンティティーを形成する源となっていたのです。そして、神の導きに従って旅する神の民として、約束された「神の救い」を信じ、困難を乗り越え、希望をもって歩んで行くのです。

自分の旅を始める

皆さんは、この春学期の始まりに当たって、とりあえず今年度の自分の目標を決めて頑張ってください。そして、同時に意識してほしいのは、自分にとっての生きる意味、いつまでも変わらない意味は何だろうという問いをもって「自由と自立への旅」を少しずつ始めていくことです。大学は、一般社会に比べればオアシスのようなところで、皆さんには十分な光と水と栄養と支えが備えられています。それでも、自分が一人ぼっちだと感じれば、砂漠のようなところだと思うかもしれません。でも、旅立って行かなくてはいけないのです。ぬくぬくと同じ所に留まっていたら成長できません。

自分の心を大きく開いて、どんどん新しい世界を見つけて、新しい友人を見つけて、自分の目指すべき目的地を見いだすために歩き始めましょう。周りには、同級生も先輩もいて、先生や職員のスタッフもいます。助けてほしいと言えば、助けてくれる人はそばにいるはずで、大学生活で自由と自立への旅を始められることは、とても幸いなことで、皆さんは恵まれています。その恵みに感謝して、一緒に歩き始めましょう。

神が、新たに大学生活を始める皆さんの歩みを見守り、導いて、祝福してくださいますように。

2014年4月9日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録